言水追福

洛春集

地

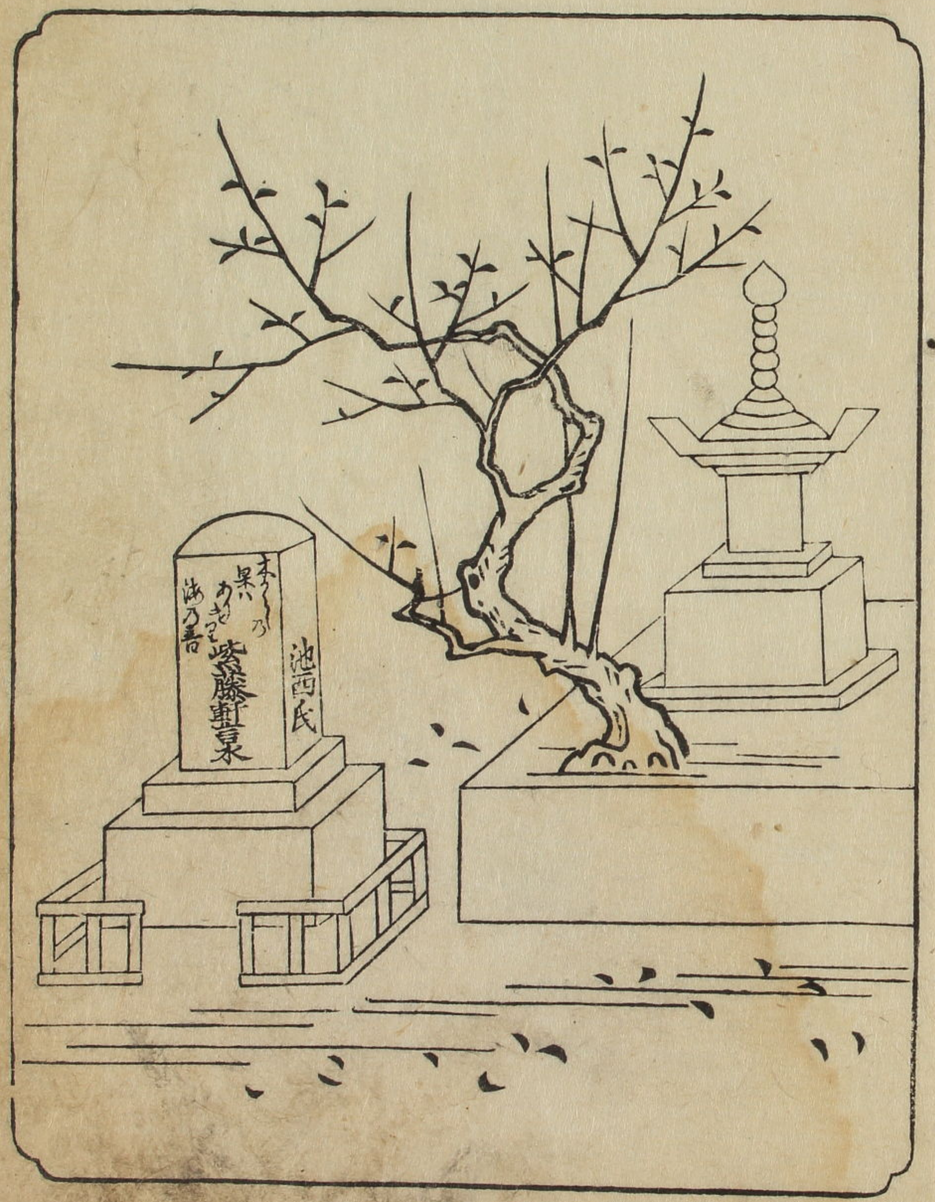
方設撰

油を売ったり
失礼を仕(二)
恵やう壮年の
信濃門尓移
信敬長九
名称法堂
侍按口変

清新変態一句ごとに風姿新
たにして久しく唯授一人
師伝の秘を説かざるを以て
奥義口授をもて再起を啓
師曰く吾れ世と倶に逝
ん我が道の亦た孤
ならんことを

松永の参拝をまつ恵永法師よ
ハ永恩の深きことを文云々
蕉心を傳へ一芭蕉を
知よ〻ふ色ま来曲を矢や其
物を見てを昔なをれる筆
をみるまハるへ話よ海を但一如

ふ潮一巡りをく朱天都
鄙の秀手ふ士の重五次よハ
つ集の栞跡ふ馬の時より追悼
乃句ここく積ス集を集て編ス
海音集ト先生の上世にとるに
派手古よ流るも牙松園こく
依て永て知きなハ句の集ん事



享保八のとし
仲律中旬
言水書金毛育
方設

賛

栄藤軒元隆士像

和歌浦洗
句恣狂懐
元隆自賛
狂句海風

巨砂子 妙

亡師常にいつくしみ給ひし恩徳
ていへんえうに忘るゝ事もなき事
なく八人生のあらまほしき
迚より此句を辞世とす扨
午時迄の内中尾口噤悦惚として後を
四肢不遂言葉又當面通ず夫寅
九月廿四日七十三ゝく卒スゝくして
を辞世の筆をうつして
式部郷の梅陳下伝ふ石のかゝ代を築く
諸子祇法の為也托爰招の須本まて書

千里の孫を訪なえそこの古家をはき
らわせよと彰考館の古文書を大心和尚の贈辞を
画像を写さんや旦言水五士
孫文蓮而これをうのまに〳〵免

洲集乃祝捜す

九月廿四旦言の水の手向よかしとて

秋を名とも五六日　白童子

池西言水九月末四日明ぼのゝ
ゟ洲祖あり
洲の旧友ゟ
持ゟ一条を

渡ゟ奴東日記やこのそん卅

露沾子

十治よもろきの葉の嵐うち寄て　治梅

苔むして字や蒲尾花乃ふるうち　治薄

人なくて弱乃形の影なるふ外　野渡

きしかふの極こゝつてん秋の雨　立圃

池西言水去月下の四日病中うれるよしを
聞つるを世乃俳
おもくみるこゝろおもひおるれるもし

風を待こゝろも池苔柏梁也　甘露堂

海上三ノ二

海音集百韻之序

天一地無二書盡一。在二其中一者。
又無二盡書一故二時
二刻一ニ新一物也。水之
流也。一一瞬不レ息。来レ

非徃ニ水ニ。穿ス乎彼ニ則有リ焉。堀ルス乎是ニ則有リ焉。彼水非ニ是水ニ。是水非ニ彼水ニ。水ニ水ニ新水也。若シ来徃ニ水ニ。徃ニ水ニ謂ス之ヲ来ニ水ニ。則非ニ知ル乎水之ヲ来ニ水ニ者ニ矣。時ニ〻刻ニ〻皆新上ニ也。一ニ〻為レ言也。一ニ〻為レ言ニ非ニ陳言ニ。息有レ言。言ニ非ニ息ニ。吟ス乎彼ニ則有リ焉。吟ス乎

海上四

是則有"彼"吟焉。彼吟非是吟。是吟非彼吟。言〻皆新言。然之是吟也。若彼吟謂之是吟。是吟謂之彼吟。則非知乎言者矣。

言〻無盡而新言也。嶽藤軒主人言水翁池西氏。而京師人也。自幼風格不凡。蕭散肉眼寸事。忽棄生理。而好

和歌。遂ニ遊ニ雒林。而如
脂葦。流ニ覽盤遊。滃薄
鬱固。胸ハ富ニ雲夢。眼ハ分ニ
湮渭。江ニ山為ニ助ケ。神物
為護ス。自レ是奇句感レ人
新言驚レ世。世人酔ニ其
言。而推奉ニ文翁不レ
得レ已。而遊ニ其席。已過ニ
古希。一日潦病滯疾。
近ニ眉起ニ色。郡生大喜。

一朝蔵レ舟。長(ク)眠(シ)二泉(ノ)底一。式(テ)二部(ノ)隣(ノ)一。知(ル)与(ト)不(ト)レ知。莫(シ)レ不(ル)驚(キ)歎(ス)也。余(モ)不(レ)レ勝(ヘ)二哀(ノ)悼(ヲ)一。因(テ)屬(シ)二五(ノ)七(ノ)言(ノ)一。而享(ケ)二霊(ノ)座(ニ)一。諸(ノ)君依(テ)二余(カ)句(ニ)一。遂(ニ)為(ス)二百(ノ)聯(ヲ)一。奇(ナル)句(ノ)新(ナル)言。不(ス)レ違(ハ)二水(ノ)義(ニ)一。之(ノ)導(ク)也。使(シ)二學(ノ)者(ヲシテ)畫(カ)二其(ノ)才(ヲ)一。風(ノ)則知(ル)二師(ノ)之(ノ)志(ヲ)一。請(フ)序(ス)二於(テ)余(ニ)一。矣。頃(ロ)同(ジ)レ舟(ニ)。余(レ)何(ノ)言(ヒ)焉(ソ)。馬(ノ)言(ヒ)レ如(シ)レ水(ノ)

而是新。別宜哉稱言
水翁也。余何言焉。余
何言焉。於是乎題ス

止々齋麒風撰

追悼於誠心院真行百韻

有ふハと千草も枯原や一面の雪

暑寒の峠篝もまた籠もる

景色をの月も入る海辺哉

輪廻よ祇もを求めかねる

勧ゑて涼めと牛の合点して

提げ行くひさご乃友

すめる代よ自ら松ふれや

止々齋

泓潜

方設

都菜

瑜動

言石

巨口

陳子百間曙ヶ　竜谷
雪の日訪山乃家　大圭
箸をわれよもと　道山
鶏鶏の土圭の埃拭掃ふより　可耕
昔すらを大こをそうすら　羽紅
甘汗の漸佛法ま味う身　知石
秋浅のまれる名を帝風越　由白
三日月の美ふ生る第篇芳　掉歌
銀乃要ふ唐中かくゆく　友元
（海上九）

幕をきる面乃そこひハ影之
国ふ一掌二許ごち来
不思儀なる微笑（にこ）のごく再び
性空ふ手ゆり意
情ふは花乃砌のてりかけ
来掬新ふ清しく（ハ）

二

ふ已午山をむき流く鈴の音
世ふの扶乃ゼ漲
元むまふるまい云変を小笹の葉

枕葉
氷花
里石
昔四
晩山
鞍石
郁九
正元
方山

貧ホ清なし一流さあを奏
傾城二育てみる浜ち鳥　　狎里
指ス眉払淵（エン）明ヶ秋　　我舟
名月の碑をこる矢る浪のか　　水色
縁ふ筆清ぬき拾る皆　　方設
なりまわと筆てこう廉の夢　　都菜
敷ほくく日もを充（フサ）るもは　　巨口
接てえて和代の味を自乃机　　羽紅
撥へ白玉むう語るて（油上十）　　大圭

三切の原迹（ホウ）ありて姓ちる
たーうふもをを無整をまする　　竜谷
二ウ
友し ホ森の小為再よ立　　友元
穂ヲあふさをはて拍掌　　江滔
入歯師ハ笠せ名利を結会　　可竜
世ーまハ更ホ乾鞋のさ刀　　氷巻
棟上の祝ハさひーきその星　　才山
おりーろ刈ル幸嶺乃蓑　　可笑
来の子も只人めろ安はと事　　可耕
　　道山

かゝる事さへ忘れ乃外の客
陳ま人目のそれはをあつき陳夫
甲子の秋私等の詩加筆多
毛ぬきして斜丁を訪ふ乎し
帆よ二三人自ひ出る
嶋尓いる客なのこる皮肉骨
板よ出る大君の辞
三糸柱の傘をたゝいゆる京境
知人ありや立章ハろ〳〵さん
（満上十一）

掉歌
由白
晩山
蒼四
知石
方山
倫動
正元
都九

迷糸迷ひ多のむさ記志発れ
袋う〳〵出尖やにな尺
ろれてくハ多森よ
又を我陳よう
母の前老女を笑
火多もかゝ千この田尓
汁座の松より
生——形う〳〵手すよ引文字
き、砂地よ飛てころひを義九

敏石
巨口
畔里
水色
知石
敏石
友元
才山
吃山

或る夫人まいて句を拭
板橋の旅宿に蕎の月
窮路より就詩を乞はれこゝを
三ウ 沸侍斎を訪ふ
挨まれ乃ち
志ゐん
ちはし
臭の
ちきれ

竜谷
大圭
遺山
郁九
友元
支設
言石
由白
雪四

待てゐる中にそれ
偶偶師ま
下伝ハ二月ま
砂子の家
乞能よ
高人の
知恵
拾ふ色
ナ 記宣ようろよ

巨口
水色
柳生
氷谷
丁耕
郎菜
友元
梓歌
竜谷

汚してか（ま）
うた寄る西は島のあい（石の竹　可矣
雲雀公みくくきらかくせる　畔歌
五条あるり（を多りり　巨口
はるし鈎籠千金の石　可竜
むつきき物の謎をハ説あるて　大圭
竹一面く翠鉄自事る　雪四
川流りをよろふ代この入る川　畔歌
産るをを（ろあるときやう也
油上三

人くの月にさ（淀（紋石　方山
不断を側よ小ゆ下案　正元
片垂乃松を地をよ納る　逍山
くの荘子ゃ（柿（枝をはく　郁九
音ハ御を指よ多乃を　郁菜
銚一本てて楽よ吟てみる　畔歌
三むりもるる稽ハ西の客　由白
（ろ也もとは（浴外の松　畔里
六月小重五（小（岩　雪四

八幡廣乃里 報いこき　道山

ゑ五七ゑもゑ五七ゑの緒　鞍石

いやむこうへく　誉社有　知石

海上吟

追悼

長崎よ交先去　必弥年　春秀伝なるん

宴よ池西氏乃翁よハ春と数もはし

祖ゑて交ゑ陣るん羽く語り伝もし

友やこの人いつのひよりゝ不枝のゆ活只

ゆりおのこくゑりを跡よ七月九日寒

四日ふ魚やのかりのゆ一昔来るる秋のくれと

き伝りて春来共現いる友る秋のくれと

おもひ立め伝も色と恵乃海三陣ゑ夢

伝れく又吟ゑ舵うき星ゆ春時雨

や陸ふやさ舵うき星ゆ春時雨

日比正直よ行佛の場ゆ勤ゆへ必定

くハあゑの玉まゆり弥りんをを春て

月と人何ゑ方去ル西へゑに　春之助　方山

宗旨新古五七日野辺送悼の会
万汝乃めの
ありてる内の
墓よ詣そくま向をか——忽

あるし起古人乃渡霊の涙　雲敏

水の流ハ落実七ツ
のゆよ竹そ
すてうそ
おるうに
こくこ云つ
も彼風の

木枯乃景やうや多も西乃空　葉門　友元

あハ雪ん此世の塵一秋の梅　立吟
立言や水よ裏かく稲乃妻　而后
めるる日此言を家一ん　流松
世此事此景をそ〻り指る葉　卜志
るゑの人ハ学〻り秋乃夜　又下
世に順一をん此なくやまり矣　恥笑

まき麦やおしくも枝を石枕青　止々斎
世ゝよしと崔ゝ世の中　言水
三ケ月乃四日ぬふり来うけ天　仝
ものあつしなに深乃こゝろそ　止
新しき月の詠をなる秋の霖　仝
和泉合はとの山ゝ　猪　水
うき(憂)ゐ(井)の男とくすも慾の嶺志ゝ志　仝
（満上十六）

五尺の水柱三又乃雪　止
書初るうらゝ安らゐぬ仏佛　仝
飯椹元ゝく　嵐　吟ゝ　水
住朝の月に外記を宵寒も　仝
千変方仏菊形詩立　止
夕烟のうハ合鮮弥路山　仝
逆波うつてたゝく所の北　水
湖めう招かりおのゝ一歩ゝ　仝
多ふゝちせゝ　仲　仝

巻の後之法の学に教ゆる事　止

法一　や鉢　巻の表乃上　仝

著衣　古ゝの杖を巻の尺　方設

別　乃袖　言水

当ゝ乞ん古ゝの杖を巻の尺　仝

ゐすれ神　福仕ふ乃袖

巻良男の又あるゝ乱雑子捉て　仝

年　中二日ゟ　沸好や　設

川音のをゝ吹ゆるゝの章　仝

ゐたゝ巻里もゝ稲の神巻　水

完年（ウ）　古の表ハ破ゐて古巻表　仝

冊子すげもて又屏風など
後朝小菊八白赤鴨　仝
私供なく天小刀をぬく　水
仰ぎ越仰ぐ富士をふしおがむ　仝
懐紙ぬれ朔日の雨　設

（俳上十八）

雑炊香すゝるものあり

うら枯やちぐさの池の雲　晩山
野送りと立ち別れある秋の人　道山
風強き日を雪よかしまき　郁九
吉行と古茶新乃松一廉　青輔
高安よ芝の秋こめる水車　旭水

吟行事

ヌり白一私めう池渕ま松　独筆
小便以松ま一ま唯賊ス　四
元組ハ楼乃至を懐ヲ　潜
舩一ヲ時ま舞き棄芽　菜
蘺ニより仕某ハ細ま水　設
妻ま打に舩前乃芝　輪
ま乃便をま舞ヲ旅の雲　凡
精一ヲ松ま壹の秋　潜
ヲ前去退くま一景ま孩ホ　四

脱ヲのをヲ猛きうまきり　設
月ま松社壇のま失加一処　菜
嫁セ作る中ホ通ま踊ま作（　凡
禿加ヲ胸隔ホ形ホの波朝義　輪
車一ま作一て牛ホ等　四
谷の戸ホむけらさ礼ま地の松　設
一ロの智ま一ヲ骨が　菜
匂乃の舌ホこち一も　凡
華ま乃海をま一ま　輪

さ伝娘をみて扉凡ま鉢ある
進んて敲如
志ちしい恩を他まに忘れん
喚き事ふ汁潘のて
沸接鍛ま財さてをみくまき
臣の吉唐し賀の海と褒
喫鏡の庖と如紙ま阮中さる
浅銅疎雨ま陽うをこの名れ
流ま當に唯ハ会有転を窮
第十九一

凡ふりのて街新一丙
時と年日如ふ法の鏡山
唐を表乃字し事

菜 凡 輪

南谷雷北梅の地を吳よと乞ふも
正庵之乞ふし茶菓而言ふ八字
而庵一松を植ちれみくり
一の八重のみかこより法師子
名をむろくふれ立のいつ弐了
にいつ一へくこの新梢を並へと
比乃栄をかゝやう事一
殊りあらとも老
而唉有
敬石

未未にも箔垣の蝸あり老蕾

岡上水一

長と来ふくに梅
谷廉乃粮(カテ)や禹の玄仙餘(ニ)すん
雪八堂二梅もみちや雪乃春
朝子は書のお八妙秀風の春
時雨あと新梢の梅やお含り
郊一ツ乃花と本枯を笹の隈
歌き云ふ集活へ一秋の水
唳鐘の録もなくや秋の風

金毛斎
暮四
市貢
可耕
又閑
楽在
文海
盛秋

秋もさそふ新仏や月に新佛　梅雪
菊多狩池みうつるや西乃空　香夕
木のうしの沙法とるうら人の景　友幸
池の芦西一吹るより鴈のこゑ　我舟
名を聞すきの身や四乃海　蘭秀
花芝ゑ神事なをたきれ帆　友幸
水去ん後ゑ法のこゑ　李負
末枯をあゝ言のこゑの玄旨　法眼 柳洞
百韻のあけらの句や夢九ツ迄　京魚

梅雪　一日に小鯖法の音
正水　行ゝ人みな立ひをおしみ
止水　ときハ木も咲事腹やいつの日ニ
古連　互むつのこまや秣すゝめ原
滴水　世人狂法んと枯野くゝ廉すも
秀水　狩ま名やゝ一ハ新宿ニ小附鳥
義重　池利ま一や云のこゑ水の景
陶水　人ハいさ木のこゑ計世のそら色　口

宝暦乃亥享保七の秋吉日

あるじ　にうの家乃人いさく然
傷をく仏んことを紙
たもひやりうま

名乃末義もゝひ海や夕札　羽紅

先哲ほ義の翁当ゆうりの碑哉
寛宿梅の像ま碑工死而不亡
者、壽芳名いや高くく薫墨ゝ
師ゝ正一　とうや

梅もちゝ海る碑（フミ）や宗匠座　知石
保雀にあゝ紙布の春草　方設

次上井田

秋ハゝ〳〵滝〳〵〳〵ゝ紙業櫂おて　羽紅
盆ちと海里ゝ多玲（アヒ）なめり　石
鴉（トキ）乃風うゝ重ねゝ夕起すゝん　設
小春祇尊と蔬て竹の杢　紅
（ウ）ゝゝみを沸製にて素のむ　石
稼（カテ）ゝ脫（ホテ）で南無観世音　設
まことを尽てハもとの房列後　紅
仙家と廓（ホカケル）地のかけ天　石
衣の砧ハ張も明行芋（スイキ）莫むき　設

一景ヲ写ス鰭ヲ黄揩ふ　紅

月ハ未(ヒツジ)猿田の波乃七つ　石

吾にくさにおて源氏多める　設

男気ハ垂下になすもの雨の鐘　紅

炊(タイ)くむりの切(レ)を今葺(タリ)　石

鮫(ハル)時よ客そて走多布の髪　設

万葉ヲ亀ヲ(ニ)辛野流もおツ　紅

ヲ舘のロ二三枚故語を吸フ　石

藻を好ものかちとの成一仁　紅

海上廿五

節句ヲさ知拓の杖ホあを打　設

奏みて退クヲ征(ユク)ます　石

雪の詰乃中に娶束紋ちし　紅

まろうセをう言尾みて雪の戸　紅

山海み加行のやはもし多の菊　設

文ニおさ海つくく汐ホ味りふ　石

矢に始未出菜て竿今切こふ　紅

汗の雀り乃法めくうね亀　設

名ゟ月祝えにゆく一歩夜のう　石

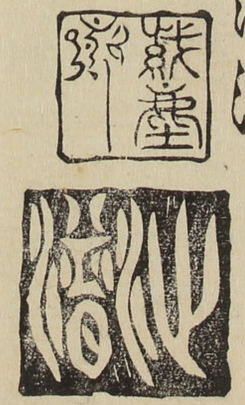
抱て去(イヌ)ル事を
ウ
さえ除のみ
勇三をもの朝杤枝う那
天ゝ代ハ疏(ケ)頴(ツヘ)すゝるそく汁
水鶏(イコ)なくなは既よ竿の竜
注ありハ治の茶笠凡乃ゑ
一ト(ト)めくり讀ム事に負鳥

設
石
紅
設
石
紅
設

言水師の壷あま仲み

狩よりもさきの枝よちる名代人
秋あるゝみりほ一筆のなのと
老茶の景ハあるゝし海の音
新ゐあく秋のま向うゑの竟
ゑ人に風をあ一筆ゑの京
雪人と成ん香ハ尚一梅和奈

其該
由白
栖生
可笑
畔望
可竜



秋茶や摘手ますます忘れ水

この一句をもて向両己

香巻を使へ

ありて余あのかをりまや百茶

如くまのく秋せりあまかに一雑千古の

茶と成諸子心得神経きやうに

経机前悉く竜宮のふるきさまをたもへた

鳴呼シテ源中を結ま烏兎押うつり

花飛茶壺高て己に一回忌よ為の神を

志ものまも香巻を使へ

秋茶や摘手ますます忘れ水

紫菴斧江潜

花の影浮世の夢を驚しハうの
人のおもひけうおもふまま

大阪志ぬ訛氏 常政

浮雲柳の糸り主なき松かれ

桃葉

ミ茶の主在茶壺の林年の春

宮朝

物忘ずしことその林年の春

宮朝

名木も茶壺なり後の奥

芦水

云のミ茶のうち枯多し水火風

老仙

人の身ぬ秋よう新しミ茶の

薄雨

いひ初す風の吹ミや初雁

花雞

ミ茶ミ人の雪りもお聖ル

喬雯

実ハ飛ンで御ゐる蚤ぶ
化一世の花の例
池まで西小雪やうのゆふ
眸やあるじ落葉の落ル
風やこゝ北窓ふを出のかくれ
蚊ともを添面白ふ
痛めうて望やむうの蕎
起て寝る間に暖うまの雪
浴衣や秋ハ来にあらハる
（以上廿七）

露計　遊笑　秋霞　同別号有　燐笛　同　梧雪　金鵬　九間　鯉階　一古

うゝ寝に移るを秋の雪
海の名残ありや雪や時雨
苔ふり一孤雲の雪や秋の塚

亡師言水くむつまでありけり白菊

その一茎餅をうりうや

廿別出羊山　芫松

廿五士雪中みも秋を姥ざし　百合

一茎ヲ雪独あるや秋の蘇　巨口

玉雅斎

一至

貝芋

一壷

竹宇

南都より立つて皇都へ上りし時

袖も襤衣裏も桂の木の葉哉　言水

めを流すへき沢桔梗一房　鞭石

秋志川の渡士八胡簶（タツヘ）掛事　暁山

五の言葉をわらにも　夢四

古町を堅う堅うして雪の幕　方設

室下妻を待てふ也　正元

俎箸の藻退あて酔の句　鞍石

戸開漆下雨ふる日の　言水

ほのうみも陽子のあをを
日ぐに茅まき用達の門　晩山
里ゝ和工業屋き払ゝをのつゝ　正元
改元觴を吟て立川藥　方設
紅白の根ハ沛子はゝのみて牝　言水
筒物事みゝく不二をゝ春　敲石
身拵す毎年多向ゝ汲の盥　晩山
すれゝちをを形よ菩ゝり　夢四
此巻もこの句ゝく名退出

池西魚を感佛して方設ゆゝく

挽詞

天下に名稲屋ゝ水の絲　淡ゝ
麦の芽や既ゝ茅野屋ハ又　大圭
海の香乃景ハゝゝ枝の雪　魚川
散ゝの雀ゝゝ梅もゝち　竜谷
三葉の杉を立ゝ神　池文
櫻鯛日ハ本枝の旅窓外　雲凡

雪雪新ゝ小角ハ一ゝゝ祇塵を把ゝ事
名ゝゝ藤ゝ部ゝ春聲ゝす

許ら兒を
乃門ゟ
殊當村
ふれて
今己ゟ
歩を
て佛
を報
木ゝし
一ツあき
言の葉
札
百十
住やか
言水
ゟ
ゟ
ゟ

そゝや雪月の
言の葉のそゝや古今の秋の月
弥やハゝくまで世捨りや水のそ
言弄て郎の利つはし秋の水　信濃上田　五湯
時よ神和哥ハ吹を木の葉　和泉堺　夕払
弱る声も弱またゝり秋の風　日　梨袖
妻なはものや花もは翁の命　日　丁突
翁の声や弱て是ハ吉もなし　日　其峯
小やあ丁のしの役もあるもの哉　日　其中

上冊

等まゝり吹仏人も秋のう郷　日　梅鳥
謡ゞ多くこかしの主人ル　丹波三井　友志
多枯乃景の果ゞ多より弘　丹波柏原　芦鴎
き声活乃るにあへ康の田氏柳　京　應信
名そゝりや言そ弱て哉ゞまゝ水　日　岑雲
去ル人を山の坊ゞしよ雪の月　日　一塵
池ありてそや雪ゞ和翁の声　丹波佐治古田氏　恵宋
云のそふや柳のくれ秋よ折凡　情夫
八月よ信治書

去ル人日ごにうとくに男郎子て

此秋ハ去年ともおもはれぬ秋ぞ　田中氏　雲水

幸未無一物

言水と鐘を一ツ殘して　立

凡のまも庵をも拂や除の季　林翁

ふたゝび秋師の跡へまねき菊を好て育
うきこれのやまひてぐりもて三十年ぬ〳〵ぬひ

彼岸の凡の供ものかきくの秋　羽倉氏　南硯

拂ふ庵さへ老りの那　井柳

世の為よもぐく俳や何の春　ゟ庄氏　我昔

此上卅一

南都立部

元帥宗旦翁ハ南都の産みなく先祖ゟ

千宗屋久之湯よそつの拙よみ作一事

雲居大重家の職をゟる我に大法廣

和尚ゟ吸仙中ゟの法子ゟ家職

淘て宗耳ゟ吸蘿斐の時昇進

四一十羊未　諱ハ指一程

令釈氏成(リテ)漂(ノ)二京城一(ニ)

朝寄富屋温寒腹
夕入茅窓唱佛名

法の為身を捨舟のうめみもて
漕ハ浮世を渡るものみきそに

是ハ元祿時の歌下略

ある誌もあり元もと子供ハ良以と改め
元もと和多ま八幡を出家ありて
京文柳以ハ南都を出家ありて

みな行七師八ゆりて九まにて義
一ゆり十二三時ゆり飛脚ハ京くだり
十四五年に京東ゑ行ハ重頼
てハより飛風をもるよりて行の重頼
飛脚ものみて江京へ上り通ふ
ものをもて免祝来ハ春ひ星霜を送れ
一の雑忘古郷やるる子供ゆめ
八重桜の下に引越て元二七年位
おもれをもて毎又九重の句もすて

かくや西のくれ半時ばかり過
半時許松音を聞ては
古松ありの地あり
ふかい人もなく
も一寺に奥れ
許多面白佳景
もとゞろかし
楊子仍宿を
記矣

追善

木枯乃景をそゑり海の音　敬山
かすかなれの鐘をつく鐘　支流
無題千子次も傾きて　彰水
雲はされうに人寒し　無吟
帝引や次第に春の雲　梅可
笠も帆も霧の川舟の奥　可住
ふや雪もの追つ降の郭了

我く夢よりさめたるこゝ地
蓑虫なく人も無き八重乃著
時ゝ別ん涙久を雪る
浅茅の沖をて漕ぬ舟をかくろふ
うしくの雲山しゝ浮
梨も敏も弓月の馬の具よかいる
星清き空も雨あるかも唐
錦一重を世の示し
義のさゝりは艇はす哥

如水　山
友可　流
一株　新
友志　発
乗之　之
一簀　奠
加友　株
可智　但
執筆　加

秋萩つ貢小撰道の文集
志ひかりのおれ林ゝ
いつゝもうゝあるものハ秋也の像
三鳥市民山家乃叢桂
淫朝の花もんの乃あゆみそ
ちゝてゝとかてむすゝ
笛の土佐錦を忠の尽ころ
善悪の河法師の業
殊あみそて手炉の神

報ぜん北斗一の字をさゝんとて　志
名ゝ有ふ孫の柄もすゝ　仁
柔ゝ知恵を一合のうち　彰
活所の萩も多の力事　山
退元下葉ゝ月の月　蔭
費之ゝゆりを吹ゝ風と　之
れていす露ふ西風涼　楼
人ゝ家の角ゝ秀　流
筑とともゝ多ゝ菜　蘿

処乃御ハを旗乃海　加
ナウ
所柱一ゝハせ机の旧詠　何
ゑゝと伊達学川の第傍更　志
頃越の伽羅　武士乃民　之
事ゝて知る暁の水の数　蔭
芸事ゝ言ゝ時乃ゝ　彰
詠のゝあゝ　仁
列名のゝハ何ゝ　山
ゝゝ外ゝ牛ゝ　楼

ゆくみを汲んで活ける水　流

追善

永水
一滴

末枯の景ハみるく日暮乃巻

小春多ひ日の雲ての天

机こゝ乃こゝろの色

（印）

岨も遠き里も優あり　狩住

雪の時下ハ黄ばめる百町子　渕鯉

萩のすゝきに風ハ涼しく　和水

脇を拵へまとめ　秀騎

ひと夢うつゝ　添軒

吹まよふ　是心

朗吟よみうり笑の笑ひ草　花騎

時年の錆をわけもう夏　志乗

芦月

拾ひてもみよ遠きの玄
初音茨絵の代表者
猫乃絵とくあをけ中元
比弥八山秋
名のを把手秋面を
春双六をかけて凡のを
難陀のもの月の雲の七
景色のきめくハ春をかりこと

志 家
和 秋
花 芦
秋 渕
渕 和
和 春
芦

十五筆をいつもかくい出給
引物ハ新も信にこころ
猪の摯肉沸馬屋の笑
洞眼のひるふりと戸月して
新ふりに思ふ多佛まう
多ゐ車の役をはたしたる
十方くれ下次痛かいさ
保和の春山ハ筆茨の拾遺の拍
くりひろ物依の能源の髪

卵をいわって祝ふ事ある由

墨絵かゝりまこと雪中の子　　志深

釜山寺のかしこまりこゝろ女の雪　　花

隣をもてなす客ありそう物　　泡

一ふし刻む無天利をも泡　　志

ほさま〻清八沢も湖（ナシ）　　和

制札を濱名の牛とみすんとみけり　　房

兄より弟子即是之濱荻の腮繍笠被りも　　芦

是　　凉

名所の雲やまの気をふき大井川　　秋

花吉て名古屋の客　　渕

乳荏も菜んな雉子の一ふし　　泡

名ゟ重し菊も久敷うき素の雫

孫一笠もまうしの陰清し　南於新水

冬枯を吟しめしの陰清し　日知圃

風乃吉ハうまや菜の水　日栃水

猶九の秋ハ秋知人の宴　日上水

木からしの名や吹おろす石のみち　日亀三

吹もやハ白雲や青の梅　日喜之

言葉純朴に泊るかし　日弁什

（裏上六九）　水北夜　日八百尺

落すゝやこゝろもとなき時雨のぬれ仏　日一志

志ぐれもあとやむものうちまて　日芦月

言の葉乃深おもてや交ゆき　日交流

小鳥さへ啼さめ鳴子の秋外　日思外

名乗や牡丹乃雪きり〳〵し　日丁伯

やく秋や硯もとく破ちより　日一笑

雷光と争ふ春の雨て久雫　日栃可

待てうら風ふ郎く垂稲うま南　日毎北

さ礼ゟ去（イヌ）る秋や菊連　日一桂

散よそ人根うつ
家秋九夢よそ
石蕗花夢こそう
梅石蕗仏のこう
玉夢九みうき仕
秋の梅や狩再よう鐘の音
菜摘やほうバてをつ秋の蓼
笠かしま火完や出人村一丸
力なや藜(あかざ)い杉ふ秋の色
岡上四十

月 乗之
月 夜志
月 如水
月 筏可
月 夜丸
月 一負
月 望誘
月 原始
月 紅石

葬りに石蕗や独一部人
時雨月も新多人の鏡外
山越や焼の白萩迷雪
百菊やうつせみ離るまで
石蕗乃秋やはつて月の舟
雲う雲うれうあぬう曦うて
秋の雲と悟しうや雪う
雪井の絶の雫や雨雨
惜ても水仙の影老母事外

月 玄琛
月 白之
月 一滴
月 和水
月 秋水
月 芦月
月 雲牖
月 加夜
月 志乗

拙言翁古の
を師のゐ所にて

秋深く帰りむを拝す翁

日　渕鯉

紫苑先生をいざなふ

秋やあと風ばをとゞめ

梅七

手束生蕪の漬汁をしてゐる
ゐるを去秋はゞの真を楽ふ秋なを
使へらんもとゝ文のうへん

日　星彩

名ゟ一木義て翁ゟ一ずゝ情

敲山

（欠）

世に句ふ菊の噂寿や池の西　水色

言の葉の末を拝む花もう郎　正元

紫苑や人をきこゝ此南都より来て
時を詠浪して台家の雪を賦し
うの句ゐおりてうめ翁ゟ

大ゐなも雪もありもの九月曲　軽人

志ゝ葉やうつむきるゝ雨のあゝ　東郊

うゝ柏乃助手翁ゟ一玄珠菴　氷花

題波もあり
挽詞
むらしぐれ
題波の泊り
去年の秋八十をとりもこんし
又もこの仲よう
そうにも
いつうまで
海上甲二

亜量坊
之白

言水
形代う
乃一句
千家ふ
山の端乃式部
百丸
うた
手付
昔や池西言水執筆
の中に副
乃流

はるかなる筆の石学すて仮名を凡
そ仮名の手もをおもしぬ人くく来ん
を祈ふ七十年の修煉も苔の上滑
ちそひてやくや忘れぬ志ふかひこゝ
いさをしにする人ふたり方設や
礼もすくなくおもはれもすくなくおもはれもと
自ぬのそひたるくして言新妙
ぬさみとりの赤りの世迄曲を之、
衣もあれハたゝさありもとさんのはかり
おふ弘の石の面こそ当なれ

新もやあ石に神仙一首すゑ　鬼貫

（湯上平三）終

追悼

老乃名を菊糸翁と改め及古稀
ゑ自ら快よのうりて称ゑ糸
名よ老ハゆゑめ墨ゑ水のこと
気のつゑめ庵に伽ゐ逝我称屋
逝ものゑ狂言綺語ゑ秋のゑ
ゑ老に呆ハるゑり鈴香のゑ
漏刻に沸るゑめ日やゑ也

扇凡子
山鶴子
冠雪子
山秋堂
今雪子
老屋主人
如高子
波星子
如々子

寒葵文庫
田氏文庫

短冊にうつるまゝ八ヶ嶺の景　鳴蛙井　山夕

六一章

院より諸侯大君乃玉紙を下し給ハるを追々今又東武より参事の歌院ニ於て拝領し給ふ参の来るを天ノ部条ニ記して錦ニ玉ふ花を辰のかゝりと称す

卯の春東武ニ到来これを地乃春ハ冠りと称す

先俳江都ニ於て五十余小冊を彩画と名付ハ孫条

玄の外ゟへて到来五十余　沾徳

五十より行もいと船ニ乗ハ　沾湖

凡そ八百韵を江戸さくら　青峨

俳壇村に浮世をすき間の風　江鷗子　松尺

舩楽の沼冬ごもる舎下も冰し　　北斗
不相子赤根の大根乃實　　荅賀
炭火まて青のろる化粧之ん　　勢夫
雪くもてあす武士のめ厚　　篤来
鉄仙の尼店前張きりします　　霍洲
田面の二日雲更て浮　　執筆
芝の沃好吉ささ竹を伐　　玲舎
おかつるくも香玖拾ん　　一路
そをやめの庚申待り茶を待　　氷谷
（傍下二）

さゝれて落る様てもあり

立するをなつけくさゝハ古い筍京　　公室
蓋（ケダシ）天をかり神ぶつくく金　　方設

二

葬つけさくく椿を蒸茶　　軽人
あれ弦薄ふ中まこの礼飯　　芥生
出川のさ鏡を集る牡丹杯　　文舎
野ちも高ふ山ぢと明神　　霍里
法要の程くもあり牧至辰　　儿麻
雪の鏡箒のうらるくと立　　荅賀
　　勢夫

園のまれこの比退々と神のる　　鴈来
猶〳〵一ゝ来ん〻ら絶〳〵さ残ゐ　　霍洲
山馬と尸合をゝやう〳〵る音　　一路
奇驚〳〵と参て喰〻ん　　狐舎
めつゝやまハ拾ゐのゐ恋ありおり　　氷谷
婦とりすゝ〳〵ゐ渡ム　　芥生
ウ
ゐも入りのお間針、命ハ雪を蒸〳〵　　仙雪
和立利ゐめう生ゐ雨乞　　軽人
鏡幸ハ静補をのる泊りゐ　　霍洲
後下四

笑ゐゐ家ゐ来って伽役　　鴈来
手かゝまゝうほて志めて花の軸　　狐舎
ワう統をゐゐる　　方設
弧布まゐゐ来

嗚呼世上八爰中此爰享保八の
と九ろ十七回忌ろ廿四日言水翁の
一周忌ろ方設ろのすめるくみるくみるくみ

飯沼の水打ち渡りやすし汐来

戸あらくしめし小春の風　集加

松よあれい拙者さも身独て　糸黒

淡きいつく惟子乃離　泥豆

梨子の真さをかや言ひ月　轍士

いまをすまふも地名こうり　敬石

ウ

まだ切の降とも降小山の秋　金毛

智ひめ降小茶ゆさいろり　士

下戸しとそれてうみも口惜き　之

傾城請ま毎朱巻あり　角

哥仙二巻

三ウ

まだまだ角上うの話をむすこ紀のゆりも

て其時半松いこ家紙小ぎりて志ほく

衆鳥同林小松ぬし又乃一會も稽亭

ぞて僕をしてうの客に

新さや二ぞ到て京北衣　其角

松の千ぞの水ハ離ま辰　金毛

折ふし吟ずる句を宗拶
打ちうてゝ帰るあとの雲朔日凡俤の彩芝
彫うゆりし水仙の香尘　集加
雀
推の実北盃にころつく雪ふて　轍士
いつ秋作しか内人の膳　泥足
雪仏ふ墨

この巻よ晋子う秋の句に菊ふけてやる
う訪うう古ふ句ふ残先師　信徳

感ふ行ふふ
是ふ好ふ残ふ句ふ発ふ
去ふふふ故人ふ成ふ
雨絵長九郎
一嵐雪ふ
一ふ花ふ入てあるふ誘引ふ時
筑紫好ふ蓑ふけ　芦雪
降ふ傘ふ八桁ふ浄ふ　金毛
五湖ふ山ふ　轍士

泥みて濁すハうら枯の顔　丹野

この老い岸をみつゝ辛て一巻哉

と舞ふ

春りけ丹野上乃春永ゝもむへ

お主人世人ゝ西ゝ祖諧ハ芭蕉門人

天ゝ天ゝも低ゝ昆ゝ或時中元

お三ゝ初中三ゝ月の私ゝ孔て狩場へ

やゝゝゝ紅葉ゝ昆ゝ狩ゝまゝ笈ゝゝ

（以下欠）

一ゝ木ゝ夫ゝ狩ゝゝゝなゝていゝゝ笈

初ゝやゝゝ桜木ゝゝ俳ゝ影ゝ為ゝ

弁三にかゝりし品ゝ又作り昆ゝ仍

俳ゝゝゝ阮宗祇独吐弁三ゝ

山凡ゝゝゝれハ花ゝ里ゝ宗祇

笈ゝりゝゝゝ谷ゝ川波

小田かゝ岸ゝ下ゝ青ゝ

うゝゝの苔ゝ乃ゝゝ笈ゝゝ

連ゝゝゝゝ又玄仍ゝ七百韻

一祖僧乃尼辞時しかえりこや
負徳翁此時を幸腰なる言葉て
して祖云つよく吟て付る阪久安流
乃阪みもき音ひてきやきやなること祇
好まい分連歌をしていやきさ祇
そつ作る事の至一の面とを
つきよといつるる事なれこの意しるをふ
家する人をうの答よ山岸宗祖乃
程分にかしやけ里るよりとまる
陽下十一

[illegible]
[illegible]
のきる面ありさたなとおくまる矢を完
里きる古分阪高程のきてて九
よよくつまへまきうと長次九の事の尼
るかち星きおおいろしよ尼ふあ
そりてこの祖尼ふる行り尼体いき
時しよ合するる祖なるよいつも
ひるしの尼依を亜きていい

當時の古風と謂ひつべし
扨本朝は唐ふみより渡りしも漢ふみより渡りしも
四百余年の間文格三度ばかり改まりぬ唐
宋元明の詩文其奇巧変態更に
極なし一云ふも万葉より古今と百余
年風俗変ずれば今の万葉赤人の分に
田児之浦往ず出而見者真白二衣不
盡能高嶺仁雪波零家留とよまむ
田子のうらに打出てみれば白妙の
（次十二）

雪は雪ながらふりてと云ふ白を白妙に
おしみふりてと改てよりて古今
に加ふる技能みゆ改てよりて古今
時代の風体と全く異なり赤人
時に小野の風体なり是亦古と
温故而知新と云ふべし
一蒐玖波集廿九雑躰連哥に誹諧を
これひろふ事見ゆ又

連今の中
まをあ
一次治
おり
秋
赤を
とふ
ま
諏訪

猿丸大夫乃弦歌を見聞れハ人乃
祇誇みる仁ハ一入まさり一真そるの
一或時なつ〻仁ハ歳毛になけ婦の唱哥
を仕る為しとて夕月しハ人のかよ〻
と上の句をつゝけてハなやと
い屋王もさ礼ハと戸閉よ惟喬親王の
席まありてハ何の苦もなく歌詠
りとごほめしと雅の音と戸出さ連
一左ぞとそて弥よまつしハ

（以下十丁）

人のよごりしとかゝうすゝ哥とゝそ
き哥ふとをそ乃答妓神男ハく
笑ひもさつまし猿丸惟喬も
人の面と米そ
本の下にをおすの枯葉我てハ治地のそ七そのうへ
多ハ如ハしふ
ゝ仁ハぬハとやてハし
ゝ乃ゝ上ハ注ま事我ゐ出さ哥同に（十三）
ゝ乃ゝとをゝく詠よまつりしの
ゝ仁ハぬ

一立圖八幸乾精純乃位去也生涯の百
姓爲爲文殊と云ふ卦象を以て六日乃
莒蘭と分野して三冊と制てみり
う筆を海う
この中に五戒よ
仍此条の因よ
祇洹まは五川の
佛佛乃說法を
まは再説をうむきたるんを
（終下十又）

出名仁旧語をあきたれ
爲爲にうたること
そこのをところ
打とうハ教生戒を犬ひうう 立圖
古を分き欲をうれて
いひ古記こと等を
ありもを分き欲と
とうう煙一り花ハ倫盗戒乃罪也
ぬすれぬ等や罪を作り在 仝

して日錄を閉き初之中みも入さて
他の年へ入さらんものやとおもひやりて筆に
半記しぬと
筆天むしの伴をめさんとて 洋尓
秋行えても秋ろ哉ときゝもさる事
ゆきまつよ淀まり也故人不可見侍(ラ)扶(ヽ)役(ス)
吟竟ンとをきつけ作り也

雪明

附さハしとそ山里乃
冴れてら雪のあけ方
(陽下十七)

水雲安濃川乃名ニ
旅ゆ哉

千鳥

ゆく秋も風ニ乱てかも川の
波打ら玉ニ

菴秋月

さもあらばかくち良な秋のら秋月
閑居

連歌試筆

言水

誹諧乃部

言水

花交松

御線

雪の朝やわ
弥生比お
鶯浮快
東御門詠一如
つり初て船
きよ
春や秋やら雪の
宗祇乃賛
(満十二年)

言水
白臺子
露沾子
天
路

拳一挽て
雪雪
住吉
ぬて玉の
朝鮮人来朝山科まて
枝梢の
国別
山宮も
お伝淀
言水
入百川

神垣りも
大井川
月影の
千句
羊面
名さむや
南都
秋好む
京うら
（下九二）

句碑土亭庵（ナラサゲ）
営奉の
百成
入おも
弘仁
初茸も
去日
那そへ
嶌尓鯨待
且角庵

父ま母やむうに安ち拝
あ門ま小よ代ま今のこねれ
初雪や
但 初雪冬 師旅
一ま
古麻や竜立ま田ひと杭 言水
ま神社ま田ひと杭 方設
菜雪の七ま預ま封切て 信安
こ
数
暑く

一雷ま午ま分白よ久ま午を存ぶ
詠ま小ま宗匠好士ま久ま午を
ま民ひ
案のお
なれ毎
一久ま根え応神天皇ま后死友の
ま膝ま御ま
ま八ま

元文の末年より享保の
比まで詩歌管絃歌
謡曲俳諧手跡なども万代
不朽のものにて芭蕉
を始めとして諸人多猶
此人ハ祇諧も西鶴より
祇諧も邪曲まで加
文ありより師の記せる
宗祇の作へよて
祇も亦是をおもひ

西鶴よりてハ不叶るゝ語が近人耳ニ
義ハ憤ニ神明ニも
あるゝおもひ入ニ
言ふも納受を

言の葉も敬うべきのみなり辛崎水　倫勤

文星入夜臺　猿鶴亦悲哀　和及郑山
揮涙讀遺稿　空餘処士梅　葉山

湖東四三叟稿

名求北辛赤も秋の風情乃　〃　投閑
秋のくう万里ハをー波の色　〃　杜之山
凡骨のかりて久ーー雲のこと

（消下二字七）

此くこの世まれ化なーー好のこと　〃　玉泉
世の様や誰を目当ーー雲の春　〃　晩翠
世の中や落乃筆も振仕也　〃　芦川
笑う乃鳴りハ波ーーー好乃こと　〃　不倫
清まる乃風雅の家急まろう　〃　友之

廿三日ハ追悼会あまた園林ことにてうまおもしめ
土刕言氏

入梅や暦をやれ尺あけくり　色山
夏の簾も空ーーやおもふ　〃
万国共境をこえ氷柱乃　〃

追悔

石楽ぶくみしもの忘し　痛ケ谷　仙喜　貴山
芒挍子も掘り清めり寒の玉　〃　波山
きの佛一笑会桂ふもとの秋　〃　山滴
云のそも草喰品寄せ雨　〃　山雨
咲よ入る梅擃の実のなる　〃　茲夕
手に移る名を石筆や指平山　〃　例志
一ともに城ちよや秋乃勧学會　〃　不醒
青雲の初そら新しやその秋　〃　山井

流星北斗もおいへ家一ト　〃　而又
大云ふ飛んで和雪や秋の水　〃　茂山
黄ろある梅のそそやてる泉　若松子竹林庵　竹史

古人の仲
和別名上山飛
谷郎

古札乃跡ある寺や寒もれも
先師の一周忌を弔ふ
なむ出家彰乃やまひ　友義菓　言石
吟けさ庭に蝉あり玉芙蓉　〃　英竹

一朱若新言水石士解脱一路名称帆来枯
景脊竜海音と善く人口に膾炙せり
云師今ハ弘誓を杖として
彼岸に泊てけり白を安く此水なんと
やりてこれ士一字を皆冠して且中の七文字
乃ち下五字を奥才好士の佳能を
もなし也

推敲の解
蕉翁乃脱
新よ立ッ一
言程や話下
水下秋名月
五湖の師と称
士称を帆掛
木
暮四
知石
信安
千丰
桃花
霍洲
羽紅
軽人
方設
ホ卄
音

一後二条院沈没無歸後詠此三首の内二首八世一事の皆冠なり
又上五七五七八短なり下ノ七ハ略
みなくちりとなりぬ并六字名歸
よろめて嘉元二年より都一万の
句筆跡を後世に傳へ
一ともん二代の賢位よりて此句乃
おくをうつハやう八吟味の陳記業
（第三十）

なりしさも元追悼の固あれハ罪ゆ
と何詠地乃三字を申ま事歟微妙
此句ハ詠ぬとも只十六句を組入くちり
して独化の勇位を追悼と并六字
其歸を形句まて秀才行交の佳句を
もとめ三遍乃廻向也

梨むくと中やぶなん名ま面　氷巻

昔うま　ぼむ　和泉梅ろ茶　市貢

なのふきと　あ　ま　秋のる　正元

多き　や　苔　ま　右左り　可耕

立秋や　伊達ま義水　よ　添足幾　仙潜

佛狸かも仏のま景　佛の歯　方設

佛ま歯をあ
吳山乃歯佛
（以下二十二）

日ろて　ま　にさすふ不八京格の一ぬ
疎影一基を輝一　二十五芸等
石面ホ列りまれあらりの末足う務
ま　山　やといけくう痕をろく
ア紙ま　の一て李式の一形之
第め

観音勢至　天冠を梅ふもかさも石ろ　軽人

宝蔵　宝冠ぜ　ま　ま　ま

金剛　押入を被ぬ和琴香の如　人
文珠　兄よりつかの筆冬ごもり　設
獅子吼　毛程の肥肉ゝ如山来厭れ　ゝ
地藏　ゆくゝ右なぶり除ふ移除　人
陀羅尼　小調市をだゝ前の序にことつけむ　ゝ
菜上　元暦常住飛切る　泌三　設
ウ
珠宝　き波ゝ公家方規矩もてなひけり　ゝ
無盡意　ゆくゝ人ゝ有ゝに賀ぶる　人
（満下二十一）

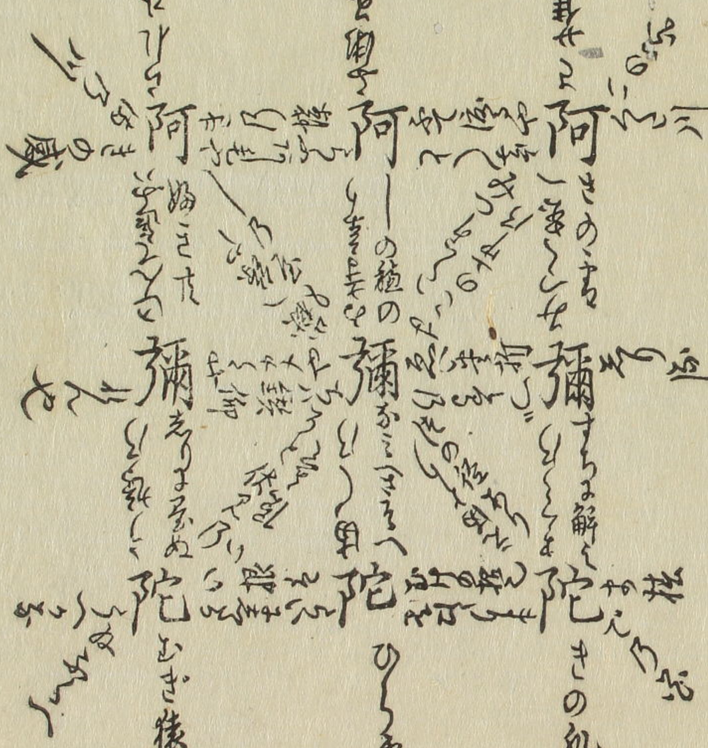
金剛藏　如つて出る神ハこんぐ〳〵茶屋元　人
菜王　扨摸柄ゝ平ゝ〳〵ゝ　設
日照　打ゆれ毎日簫小追除ハ　ゝ
月藏　雪降ゝ地走にする市の月　人
虛空藏　稲茂くゝ雀ゝ新ゝ新の中ゝ児　設
華敬王　一銚の号雪流巴黄重　人
普賢　足て化粧ふ文ゝハゝて立の山　設
仙海會　恩尓毒拵の家の集　矩（ク）へ　人

蓮花王　乳噛（カヘ）ろちゝそしむけ王の皇　人

宿王　名八一のひの智法吉より汁　、

宝性　救討号我宝生ふゝりろ宝　設

日光　千人の句日光の崖　、、



方設

一字点式ニ度改正ニて云々より譲ニも
一差神をこれをこの点あ五十点ニは用之
七十点ニ以ニを点拾ニ改る不左の
ことし

長
桜
鶏明
西湖
北列
南極

是ニ言水巻押ニ

(裏下二十四)

桃源ニ花
香炉峯
雨奇晴好
紅苞白玉
玉海千尋
明鏡止水
宇宙第一

但秀逸ヲ色帋ニ書貫

右

言水筆全毛商
方設

南都の人師恩を謝し皆悲哀哭踊
一心袈裟服して一周忌を弔ふ会一句
を伝一を敲山堂より一章を乞ひ
つゝめて到来をり諷誦深重のこゝろ
をやまとことばに伝ふ

秋風やをろがむ世おほし　勇敢去仕す　良長

寛喜二天　南天乃実そ一めくり　梅七

（法十三十五）

風の跡もさくら曲の咲くりて

苅株も春は咲くりの乃哉　八首凡

をり人のこゝろ我をして

貧賤ノを愛二ノを一年を耳よいまし

況ん世の愛ふ顧を牡丹　一貞

云のそれ春依旨か一秋のを　完氏

ろよ花咲春のこゝろ　吟凡

甘干れ新ハ文なり一くれ　一簣

其安全

一休の弥を帝老ひて赦よ入給ふを
五去より好ける多かりや赦ふり　利凡翁　随志
初春い浦くく我もを州のを　一子翁　味文
云の禁好聖りや次事よ有さ　西車翁　友志
う好枝の弥や蓋を極る禁　東凡翁　花談
文筆の海の音や人を
巴童斎　一桂
（欄下二丈八）

奉追福

まうしの脱ふくや一周り　四七翁　敦山

右

一族乃幸玉事八

たゞ一枝や菊千老ものを追悼
いくえも多仏手や神の前　池西　陸程
風そよ出や菊塔の手向水　円苗　良則
村井　宗故

三笠山去年見て後秋の雲　今井松葉翁

云のそふ八うの仲や菊月夜　村井又水

夏衾の海よりふかき情かな　方設門亀水

世八笠の志ぐれの柿も校葉ル　定次

云のそふとおすゑやの菓の如　言水姉妹女

あつらしのそやうのまゝ法の春　元女

口接口改を口一ことも

ま言の中ハ爽也銀杏ル　方設

礼娩一くも吹をか美鳩　元女

水筋ふ好なの光りをそのまゝて　素女

（俳諧二十七）

人の寒する時よい言そ

水前生家の法花持を居春ふ

ふ風才くを梅林二の一茎八秋人

巾を混すふ指す苗時雨して

遠渡碎と唱そん也宜ふ人

ふの色をふにさす梅畑　信安

市中ハをゝ言そ秋　方設

市ふ的の影もふ滿て　市貫

淡しき味を交へ
古耕せる竜の宮古も掃払ひ
伊乃奈相を彼をなし鞍
ウ 刷みそうけて流すハ狂の帳
めつるに油臭い小性多安
おそ兄とハへくまでめよぬて淡設
雲まへくてあるて素帯貢
数寿哥多ねの雪らな夜
三日浴ちくる浅至投まて肥耕
（以下二十八）

放夜
可耕
正元
猟筆
安
設
貢
夜
耕

非代より名のなき橋ハあらなり元
毋多志ぬひ空う笑産設
月うすき村の佛多の猟り膳安
板戸の桔梗彩色ハ来夜
悟空すき時まで花多の倩受色耕
角落せてしこう指古元
二
添て事事小向丁のホ奥貢
今法橋日乃流ハ序来安
所と姒覗の号もの高多時設

沙賊と沙城と　耕

雪晴を四百余騎より走めよと　夜

薄さ厚さ後ろに弓射ぶひ　貢

矢のねさ弦胡ももゝ

乳まく足を星のなす在　設

鴈が鈴吉車のそらゆくは　胡拂のくま　安

玉を学子て義を山茶花　夜

お声もよひ笹好う川のと　耕

見送る笠乃雪に明くり　元

（朱下三十九）

二ウ

朽株の汪連よ導へて孔子し　貢

劔小比丘尼を追て鐙麥　安

目つゐも吉ひ二尾哉　設

仰ゝ飲せ麥しくり　耕

娘きて亜士日子ゐい宮の主　夜

解るけ一さを

山乃雲　筆

かとのかぜの車乃めぐりて
一周忌ゆいとなみ成うる事
ことはのつゆ多而等の泡
万失せうこと——浄土
た由滅——て
人也空や人哭笑云
ひなーーと云
文

寸松堂
知石

うみ乃そこをおとそへの水ゝ
爰而つきをのみやうの居の程ハ
秋よさおき浦乃人をいつ我いつ

ゝやう迄奈ゝ稲荷ゝ
康名葉

有ア毛と発ゝ
路通

古人云光陰如箭始知宜哉吾
師言水遊於南都之日詫于同
志而得連綿百韻矣熙ニ焉謀
鋟諸梓未成而卒予継其志加
海音ニ未譜事異而遂其志則
一也為志滑稽警者夜走北斗霧
海南針穿誠ニ如箭ニニ

（以下欠）

見ムとも花雪見の窠や松乃ゑ　言水
鈴を期する袋うらやの　鞭石
盃讃の山も笑ひて凡そ死に　晩山
砂のみそ芳き点をこと〳〵く　遠山
雪のまち数のまゝ称まて　倫動
なつけど栗嵐ハるこいうる　方設
才園乃ゑ小万里ゟ雪ゟろ　負佐
うくろゟ秋の轍うけゟ　信安

ウタヘツサ
赤電子の照付たより待ぬらん　知石

　落ちかゝるく夢のもやくより　臣口

山の尾のうつろふ色を包こと表すたつ　放夜

　ちらく流る瀬の音　雲ゐる　市貢

松枝の中を包ち鐘こゑ乱れて　ヤ耕

　初丁撮こさゝり　拾遺　羽紅

ちるくれてんをて諫メてくれなり　暮四

　鶏鳴くいつぴ浮橋の利　独筆

のつゝのて廓出るもいさや川　道山

（以下四字二）

（以下四字二）

監（シホ）笥（ケ）小さゝみよ春のやくく　秋翠

岳の音ゝ絶るをたゝと利口ぶり　桃隠

三曲のち我侍よ年、湖　都麿

軟障（ゼジヤウ）よりセ尺去て花をさゝ　其諺

嫩（ワカ）い思案ゝもつさゝて半　青輔

二

帰ー行うつゝ心雲邑　旭水

泥すゝの春ゝ宮嶋の金切　松枝

ゆるしと肩越入ゝ来弓　梅色

春見よ先茶臼やくり　盛秋

蒲許不左衣の油法も風流る　一古
賦をよ諏メよと義一を山　一壷
和ら降一面のをつ色の杜多　居林
まみ〳〵も白く改めて霧る　正元
多く空よ幸を重て牛も婦一いう　芦沢
庭よ貴を参〳〵をつ吹〳〵　芳夕
借し傘好う〳〵り今日昼の月　優士
小鷹の供奉のうまる舩　菅丸
菊のきも仁手王三扇に〳〵こ多　赤井

（次下四十三）

五尺の竹ふえき　桃葉
口にををてうおを笑ひる　遠山
電ら媚ろ好きんる　晩山
望よ指他よ階子をかまも　敏石
森再よ幸錦柾乃をと　言水
地黄煮て歯をぬいてやるなき　信安
尺なゝきり日八景を鎖（サス）明　知石
ちこりおろもも治ての名うを　秋娶
も絶て古今に赤人乃化　負佑

羽紅
居林
市貢
可耕
方設
暮四
正元
其該
一壷

神祇の宵中ハ法もに御を
斎相よ吸ふ竹の家菜
為て紙毎ハふ仏のて
この羽ーかづまらた
内外の井ま良香多の会
まことふけさ紀けうら春
三
国ある三月画め務のふき
陲をかくまり狛(コマイヌ)児の多
宮殿のるいとぬと花末尖

(はつ四十四)

奴帳借りまる者彫する
この器へまにうるやまま出帆入帆
阿(アシヤ)女ふ嘗もるふる話
ひ男七人竹ま住ふがり
うけたてうる謎ハ仏の(
ぶらふも解多の小破
くるや秋せ駄二
香ふる撃ものる 蕎
言をふけハ仏の松へ月

喻動
松枝
旭水
青浦
放屁
雀秋
芦沢
唸山
一壷

弓取の涉舟西瓜に石ふる　暮四

舟打ち水の七里ゆく　道山

再興法佛三ウ　其隣

法論味噌すり棒をひらふ　遠山

ひめをさし娘小袖を着かへや　旭水

すゝや芳れる葛水みう　秋翠

乞食一の門さす森を奪ふかつを魚　負佐

義をすへつる麥めの嗤　梅色

世のそしりを波小流る猪角力（由下平又）　言水

稼ぎ人の和讃の萩を吹こす　方設

盂蘭盆の名代をのべて二百文　松枝

ちよとさつる神蜀へ入る　盛秋

沙風や雪舟ゆきの額つき　羽紅

天井もうれ秀に翅著　鞭入

餓別の芸をして明る也　秋翠

草芳一く簷著てる　信安

名

恙なくか我の弟梱の山うつゝ　道山

餞別な詠る壹をこゝり　一壺

翁のおもとゝ
その答のお
ひゝやきも大
邪正一
噂を恥くい
精南車
豁然の七
洗いる
意ぬ衣の
（後ノ半六）

後ノ脱ヌケ
志てゆく猫ハかそゆき境の隅
茎乃壓（オモシ）石を取子待てる
名ノ
う犯しきハ京
志賀
重ふれハか
玄ゝうに
なてこの
屑の恥

居林
真詮
信安
言水
盤狄
可升
巍石

信安
遠山
道山
方設
其諺
青浦
言水
正元

君尺よや宮のまゆさ井まのま　敏石

をおしへまつる　知石

墨ぢみもりい鳥

（俤下四十七）

[illegible]
かくく画しおきたまふやあるよ
くま言水面前の教養りこと方設子
餘を下の句を追ふて集筆ふて
師門の治をかゝるの激意を
十三年の望をいへども雫ふまりて
志ふ矢よいへども
先ふ手祭の春門ふて
宗藤新よおさ日かゝりをふ

清ふも月
明来西行隆寺

暮四

海音集巻終

橋ふるう

淡ゝ哉湖上を富士をも

後乃月　言水堂

ちつまよ春の按合影や今　知石

梁の如く仕立ふるや

去ゝ酔時のく

水色

享保八卯年孟冬中浣

京堀川四条上ル町松壽軒

書林　今井十左衛門板

追加

紫茂都五十余仙の
追加ニ出さるゝ
おもひもの

水色　的場行平奉堤われもかう
方設　祢ゝ子ニ寄せたくみの
淡ゝ　夢の秋五十余の鬟定むる年
大圭　身荷の白ひるがほや掌の虻
設　水至瑞ゝの沸通り一片

蝋を粹に祀はみしつき　色
和乃綱手繰り寄せる線探び　圭
のりものの　淡
いひ陰の世上へ吟てまはゝ雨　色
ふくの袂と越す矣の雲　設
帯麻まて出合ふ約束松ケ枝　淡
海雲手前まもる山峡　書
二夜唄て乗はゝ一圀の主　没
多き土まていやはき美戸　色
（追加一）

一被尓目利業利唐使　圭
箕ま降ま音我支衆るあり　淡
吾口打上ま都まる金剛草　色
垂のむまは残り雲吹祓　設
日ハ夏に入てつゐとき九月尓　淡
涼く蒼む古乃杤の緑　圭
帆て通る号井ハ布の満る時　設
春ま使つとゐのを待　色
二
誉る使つとゐ矢畑を代　圭

衣かわきたに乾く尼の歯　設
絢のうるしうつくしハ岩ほ巌石　色
市川膳をまねきし牀上　淡
白湖かえ屋のかぜのかたるうち　設
梧桐の雨をさまりて禅の湯をさまし　主
石蕗の葉を独楽よ一先人の上　淡
市川景ふかくるさけ重　色
追さまに衣のをつきたる笠の雨　書
判て衣を著をそ　淡

（湯追加二）

春立と秋見うきを紙漉の　色
名も愚ふえ指油よ稲咲みち　設
衣かんと指油よ稲咲みち　淡
よりつくたる烏帽子の　色
注ことにて一星馬場実秋ハ　設
仙衍さ月ハ油煙来る　書
附さしお氣さつうき重四十　淡
扇を投て笛のうら尼　色
玉除ハ他人のえむ　淡

佛師もつれそひ殿色
南名手めうちの黄散花の雲圭
林檎蒼そめ
其栄ある有洟

海音集成レ夫編レ之
者ハ誰ソヤ也金毛齋方
設撰ス焉止々齋麒
風作レ序ヲ呂テ與レ是其

言也至
余曰紫
以壽終
乎世矣
藤軒言水
矣誹名舊
句驚乎人

群生伸追慕之情
交友致懐旧之思
而作句
聯語以呈
輯之録之
其意趣

雕レ梓而貽二後世一
蓋繼二其系統一者乎
示レ余乞レ跋余倭歌
誹林雖レ未レ學曽祖

貞德以二是道一傳二童
頼一重頼又傳二言水一
則非レ莫レ所レ以也不」
能二固辞一困レテ以書

講習堂人昌迪誌焉